

J.S. Bach と敬虔主義について

飯 島 隆

序

J.S. Bach (Johann Sebastian Bach 1685~1750) はバロック時代を代表する音楽家である。バッハと敬虔主義, 神秘主義との関わりについて考察してみたい。

バッハの蔵書

F. ハーメル (Fred Hamel 1903~57) はその著『バッハ時代精神』¹⁾の中で、バッハが残した書物は81冊であったと指摘している。それら81冊の書物は教義書, 釈義書, 教書, 聖書講話集, 信心書, カトリック及びカルヴィン神学に対する批判書, ユダヤ教に関する書と多岐なジャンルの神学書とされる。

このうちM. ルター (Martin Luther 1483~1546) の書物が全体のおよそ $\frac{1}{4}$, A. プファイファー (August Pfeiffer 1640~98) のものが $\frac{1}{8}$ を占めているのである。

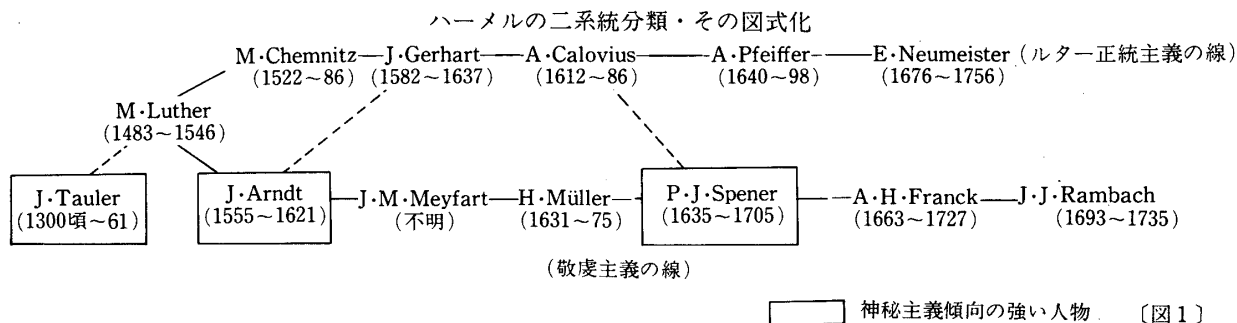
ハーメルはそれら81冊の蔵書を大きく二つの系統に分類している。それはルターから始めてM. ケムニッツ, J. ゲルハルト, A. カロヴィス, A. プファイファー, E. ノイマイスターに至る線をルター正統主義の線とし, 一方ルターからJ.M. マイファルト, H. ミュラー, P.J. シュペーナー, A.H. フランケ, J.J. ラムバッハに至る線を敬虔主義に至る線としている。(二系統の図式化参照) また敬虔主義に至る線にJ. タ

ウラー, J. アルントを加え, これを神秘主義に至る線とすることができる。

次にこの敬虔主義, 神秘主義に至る人物とその書物について若干の概説を加えてみる。

J. アルント (Johann Arndt 1555~1621) の『真のキリスト教』(Vier Bücher vom wahren Christenthum)。アルントは信仰の内面性, 情緒性を強調した人物で, この作品は神秘主義傾向の強い作品である。アルントはこの中で“悔い改め” “より大いなる照明” “愛による全くの合一” によって独特の神秘主義を説いている。現存する1606年版の書物は4巻から成るが, 1609年に出版されたものは4冊が一つにまとめられたものとして発行され, バッハの所有したものはこの書物と推定する²⁾。

J.M. マイファルト (Johann Matthäus Meyfart) マイファルトの『ドイツ各地の福音派大学から消え去った秩序と尊敬すべき慣習についての善意あるキリスト教的想起。ヨハン・マテウス・マイファルトこれを公にす, キリスト紀元1636年』(Christliche und wohl-gemeinte Erinnerung von der aus den Evangelischen Hohen Schulen in Teutschland an manchen Orten entwichenen Ordnung und ehrbaren Sitten. An den Tag gegeben durch Johann Matthäus Meyfart im Jahre Christi 1636) は当時のルター主義における風紀退廃の指摘とその改善を迫るものでシュペーナーの著



した『ピア・デンデリア』の先駆となる作品と
言われている。

H. ミュラー (Heinrich Muller 1631~75) の
1664年に著した『宗教的な清涼の時』(Geistliche Erquickstunden), 1676年の『神的な愛の
炎, もしくは, われわれに対する神の無限の愛
を思い描くことによって神を愛することのす
すめ』(Göttliche Liebes-Flamme oder
Aufforderung zur Liebe Gottes durch Vorstel-
lung dessen unendlicher Liebe gegen uns),
1681年の『三つの階級すべてにみられるヨセフ
の欠点(すなわち傲慢)に抗する福音的予防』
(Evangelisches Präservativ wider den
Schaden Josephs [das ist die Hoffahrt] in
allen dreien Ständen), そして1663年, 1672
年の『連結推理と力の核, もしくは通常の日曜
福音ないし使徒書簡の根本的解決。精神の意味
にのっとって文字を説明するのみならず, 基の
言葉の力ある言葉から信仰の強化と生活の改善
をも引き出して講義し, 公開の説教にて提示す』
(SchlußKette und Kraft-Kern oder gründliche
Auslegung der gewöhnlichen Sonntags-
Evangelien bzw. Episteln, worinnen nicht
allein der Buchstab, nach dem Sinn des Geis-
tes erklärt, sondern auch die Glaubens-Stär-
kung und Lebens-Besserung, aus den Krafft-
Wörtern der Grandsprachen herausgezogen,
vorgetragen wird, in öffentlichen Predigten
vorgestellt)。ミュラーは学者というより実践
家と言われ, これらの書物はルター正統主義に
たちつつ敬虔主義への移行を告げる信仰感覚を
感じさせるものであると言われる。

P.J. シュペーナー (Philipp Jakob Spener
1635~1705) の『正当なる熱中』(Gerechter
Eifer), シュペーナーは主著『敬虔なる願望』
(Pia Desideria)³⁾ によってルター派教会の改
革を提案した。彼はこの中でやみくもにルター
主義を攻撃してはいない。アルントやタウラー,
トマス・ア・ケンピスという神秘主義の人達を
敬虔の実践において称賛し, 勧めてはいるが正
統主義のJ.ゲルハルト, ルターをも引用して
いる。第三部, [教会改善の諸提案]の中ではル

ターの言葉を直接引用し, 宗教会議や聖書研究
の防げによって聖書の純粋な認識が失われるこ
とのないよう説いている。この点でシュペー
ナーの説く敬虔とはルターの主張した聖書に帰
ること(聖書のみ, 信仰のみ), 信仰の原点に戻
ることへの勧めであると言えることができる。こ
れによって彼は敬虔主義の父と呼ばれた。

A.H. フランケの『家庭聖書講話集』, フランケ
の後継者J.J. ラムバッハ (Johann Jacob Ram-
bach 1693~1735) 1730年の『一年中の日曜およ
び祝日に関する福音的考察』(Evangelische
Betrachtungen über die Sonn- und Festtags-
Evangelia des ganzen Jahres)。1725年の『イ
エス・キリストの涙と嘆息の考察』(Betrach-
tung der Tränen und Seufzer Jesu Christi)。
1733年の『人間の劣悪さに関する神の忠告につ
いての考察』(Betrachtung über den Rat
Gottes von der Schlechtigkeit des Mens-
chen)。

シュペーナーの友人M. ガイエル (Martin
Geier 不明) が1702年に著した『時間と永遠』
(Zeit und Ewigkeit)。

ルター正統主義に至る線の中にも敬虔主義的
傾向の人物をみいだすことができる。アルント
の弟子であり, また友人であるJ.ゲルハルト
(Johann Gerhardt 1582~1637) の『スコラ・
ピエターティス, すなわち真のキリスト教徒各
人はいかなる原因によって法悦へと動かされる
べきか, またいかなる形でその訓練をすべきか
に関する, 効果的なキリスト教的教示, 称賛す
べきイエーナ大学の教授, 聖書学博士, ヨハン・
ゲルハルトこれを著す』(Schola pietatis, das
ist: Christliche und heilsame Unterrichtung
was für Ursachen einen jeden wahren Chris-
ten zur Gottseligkeit bewegen sollen, auch
welcher Gestalt er sich an derselben üben
soll. Verfaßt durch Johann Gerhardt, der hl.
Schrift Doctorem u. Professor in der löbli-
chen Universität Jena)。これはアルントの『真
のキリスト教』の変形であるといわれる。アル
ントの弟子であるならば当然, 神秘思想の影響
があったであろう。

ゲルハルトの次に位置する A. カローヴィス (カロフ) について言うなら、バッハは 1733 年、ライプツィヒ時代にカローヴィスの注解付聖書全三巻を入手している。

カローヴィスはルター正統主義を代表する神学者であるが、彼自身は神秘思想の強い人物であると言われる。

ハーメルは二系統の分類のほかに H. ヨセフスの『ユダヤ人史』、ハーメルはヨセフスに次ぐ奇妙なる書物とまで形容している神秘主義を代表する J. タウラーの『すべての日曜および祝日のための宗教的説教』(Geistliche Predigten auf alle Sonn-und Feiertage) を挙げている。

バッハがタウラーの書物を読むこととなった動機はおそらくルターによるものと考えられる。ルターは 1516 年『ローマ書講義』の中で「神を受容し、神に耐えることについてはタウラーを参照せよ、彼は全く他の誰よりもみごとにこの問題をドイツ語で明らかにしたのである」とあるし、同年、友人のシュパラーティンに宛てた手紙にも「ドイツ語で書かれた純粋で確かな神学を読むことが好きならばドミニコ派のタウラーの説教を求めればよい」⁴⁾ と書いている。

次に蔵書に関連する、バッハのメモについて紹介することにする。

『ルター選集』についてはバッハ自筆の受領証が残されている⁵⁾。バッハはこの時、ラテン語訳のルター選集も所有していた。この受領証の内容は「いま亡き M. ルター博士のドイツ語によるすぐれた著作集 (これはヴィテンベルグの偉大な教区総監督にして神学者であるアーブラム・カローヴィウス博士の蔵書の一部であり、かつ、博士がその偉大なドイツ語の聖書を修正するのに用いたと思われるところの、そしてまた博士の没後は同じく偉大な神学者である J.F. マイアー博士の手に渡っていたところのものである) をば、ある競売において 10 タウラーにてせり落とした。1742 年 9 月、ヨーハン・セバスティアン・バッハ」とある。

この受領書に書かれてあるカローヴィスはヴィテンベルグ大学の神学教授であり、ルター主義を代表する神学者である。ルターは 1507 年

司祭となり、後にこの大学のシュタウピッツの後任として大学教授となって終生その職に留った所であり、居住地の修道院は宗教改革の基となったルターゆかりの地である。

このルター選集は正統主義のカローヴィスからライプツィヒの神学者マイアーへと渡り、バッハが入手したのである。

1722 年、ケーテン時代、バッハは妻のためにクラヴィア小曲集 (アンナ・マグダレーナ・バッハのためのクラヴィア小曲集) を作曲し、その楽譜帳の表に書物の表題と思われる覚え書きをしるした⁶⁾。

「反カルヴィン主義論、および
キリスト教教程、ならびに
反メランコリー論
神学博士プファイファーによる」⁷⁾

この覚え書きの意味するもの「反カルヴィン主義論」は『反カルヴィン主義論、すなわち、改革派宗教に関する報告。改革派、もしくはカルヴィン主義者一般が、その信仰および教義においてわれら福音派からどれほどはずれているか、そしてのぞまれる一致にいたる最も正しき道はどれかを示す』(Anti Calvinismus, das ist. Unterricht von der reformierten Religion, wieweit die Reformierten, oder insgemein Calvinisten, in ihrem Glauben und Lehre von uns Evangelischen abgehen, und welcher der richtigste Weg zur gewünschten Einigkeit sey), 「キリスト教教程」は『福音キリスト教教程、なかに全神学体系、もしくは、日曜および祝日の福音テキストから正しく整理して明瞭に示したるキリスト教の諸条項をふくむ』(Evangelische Christenschule, darinnen das gantze Systema theologiae oder die Articul der Christlichen Religion in ihrer richtigen Ordnung denen evangelischen Sonn-und Festtags-Texten deutlich gewiesen), そして「反メランコリー」は『反メランコリー論、もしくは突発するすべての誘惑に抗する有効な手段をすべての誠実なるキリスト教徒の手にあたえるメランコリー追放の書』(Anti Melancholicus oder Melancholey Vertreiber, welcher allen

rechtschaffenen Christen ein bewährtes Mittel wider alle vorfallende Anfechtung an die Hand gibt) を表わすものである。このプファイファーによる三冊の書物はバッハの蔵書の中に見いだすことができる。

ケーテンではカルヴィン派とルター主義とが対立していた。レーオポルト公の父はルター主義の女性ギーゼラ・アグネスと結婚したからである。彼女は夫エマヌエル・レープレヒトとは別のルター主義の聖アグヌス教会と学校を設立した。バッハもこの教会で聖餐式を受け、子供達もこの学校で学んだのである。

バッハの生涯で一番恵まれた時代、それはケーテン時代であったとすることができる。しかしケーテンはカルヴィニズム、バッハの意に反するカルヴィン主義の場所であった。

クラヴィア曲集に書かれた覚え書き、この意味するものはバッハが自らのルター主義を守るための神学的学び、と考えるのが妥当ではなからうか。

バッハはケーテンからライプツィヒ (1723年5月)へ移った。ライプツィヒでは敬虔主義に対してどのような態度をとったのか。

シュペーナーによる影響はA.H. フランケによってライプツィヒ大学で敬虔運動が起こされた。しかしシュペーナーの敬虔運動はまた正統派からの圧力も強く、とくにエルフルト、ハンブルグ、ゴータそしてライプツィヒに大きかった。

G. シュティラー⁸⁾によると、ライプツィヒではA. ベルントという説教者兼教理回答主任牧師は1725年に敬虔主義的傾向のため解任されている。また1734年、聖トーマス教会の土曜日説教者、F. ゴットロープクランツは敬虔主義への傾斜を表明したことによって職務停止処分を受けている。

このようにライプツィヒでは敬虔主義の運動に対し1690年には公的禁止がなされている。しかしこのような厳しい処分が行なわれた事と並行してライプツィヒでは公的礼拝の強化、教理問答の学習、その他様々な宗教行事が実施されたということである。

このように敬虔主義運動に対しての圧力、ルター主義を堅持するためにとられた諸行事、これがかえって逆作用し敬虔主義に対する押えることのできない内的欲求を生み出すということも考えられないであろうか。

バッハの敵

バッハという人物の生涯をふりかえてみるならば、他のどの音楽家にもまして肉親との別れをこれほど多く経験した人物をみいだすことができない。

1685年3月21日、父アンブロジウスと母エリザベートの8番目の子としてバッハは生まれた。バッハは9歳で母エリザベートと死別し、つづいて翌年の1695年2月24日父アンブロジウスを亡くすのである。この年、オールドルフに住む14歳上の兄、J. クリストフのもとに引きとられる。その後、1700年3月15日にオールドルフの学校を退学し、旧友G. エールトマンと共にリュネブルクへ向う。バッハはリュネブルクの学生として過した後、1703年アルンシュタットの教会オルガニストに就任、1707年にはミュールハウゼンに移り、ブラジウス教会のオルガニストとなる。

この年、ミュールハウゼンで最初の妻マリア・バルバラ (Maria Barbara 1684~1720) と結婚し、バルバラとの間に7人の子をもうける。このうち三子のクリストフ、四子のゾフィーは双子として生れるが生後すぐに死亡してしまう。6番目のゴットフリート・ベルンハルトは後年24歳(バッハ、ライプツィヒ時代)病死によって生涯を終えることとなる。7番目のアウグストは生れて翌年に亡くなり、妻バルバラとの間に生れた7人のうち4人を失うのである。

1720年5月、バッハはケーテンで最愛の妻バルバラを失う。この時残されたのは長女ドロテア12歳、長男フリーデマン10歳、次男エンマヌエル6歳、三男ベルンハルト5歳の4人であった。

バッハはケーテンで1721年12月3日、アンナ・マグダレーナ・ヴィルケ (Anna Magdalena Wilcke 1701~1760) と再婚し、マグダレーナと

の間に13人の子をもうけることとなる。この時バハ36歳、マグダレーナは20歳であった。

1723年5月バハは新任地、ライプツィヒでマグダレーナと4人の子と新しい生活を始める。しかしマグダレーナとの最初の子、クリスティアーネ・ゾフィーは3歳で(8番目)、10番にあたるゴットロープも3歳で死亡してしまう。つづいて12番目のアンドレアスは生後2日で、13番目のヨハンナは5歳で、14番目のベネディクタは5日、15番目のドロテアは1歳半、17番目のアブラハムは9日目にそれぞれ世を去ったのである。マグダレーナは合せて13人を生むがそのうち9人を失うのである。実にライプツィヒ時代の1726年から1735年までの9年間では7人を失っているのである。

バハは子供の死後間もなく聖餐にあずかったとされる。バハはふつう年2回、聖餐式に出席していることがわかっている。ライプツィヒでは1724、1727、1732年に各々三回出席している。1726年8月8日の聖餐式出席は6月29日に亡くなったヘンリエッタの為、1739年5月28日の出席は5月27日のベルンハルトの死を示すものであろう。

父親としてのバハはバルバラとの間に生れたゴットフリート・ベルンハルトに対し、特に愛情を注いだ。それは1738年5月24日、ベルンハルトの借金のためザンガーハウゼンの市長に宛てた手紙からもわかる。その手紙は「もはやいかなる訓戒も、否いかに愛情深い配慮も助言も役に立たないでありますから、私は自分の十字架を忍耐して負い、わが不肖の息子をひとえに神の憐みに委ねなければなりません。神が私の憂いに満ちた願いをお聞きくださり……」⁹⁾と書かれた文面から知ることができる。バハはベルンハルトのために合計4回の手紙を出し前年の1737年5月にはザンガーハウゼンに直接足を運んでいる。しかしこの不肖なベルンハルトはザンガーハウゼンのオルガニストをやめ、その後イエーナ大学に入学するが1739年5月27日熱病によってこの世を去ってしまうのである。

バハにとってのこの度重なる我が子の死に

よる経験は重い心痛であったことと想像する。この経験はバハが生きてきた生いたち、すなわち、幼くして経験した両親の死と二重になって彼にのしかかってくるのである。バハにとって死は避けることのできない、動かすことのできないものとして存在したのである。

バハの生きた時代、彼をとりまく社会はどうであったのか。

ヨーロッパ全土を巻きこんだ30年戦争(1618~1648)はドイツの諸国をも包み、都市や村々は破壊され、荒廃し、これによって人々は信仰をも失いつつあった。しかしルター主義信仰の形骸化は敬虔な信仰も求めたのである。

この時代の生活様式、生活環境は現代と比較にならぬほど低いものであった。中世に大流行したペストが1600年代後半に入って再びヨーロッパを襲ったのである。ドイツの都市もこの例外ではなかった。1700年の春、バハが旧友エールトマンと共にオールドルフからリュネブルクに旅立った直後、オールドルフの町は疫病に襲われたと記録されている。バハのカンタータ140番(BWV 140)オルガン曲「めざめよと、呼ぶ声がする」(Wachet auf, ruft uns die Stimme)に使用されているコラール旋律はP.ニコライ(Philip Nicolai 1556~1608)によるものである。1596年、ニコライはウエストファリア、ウィннаの教会牧師であった。当時ウィннаの町は疫病によって1300人も死者を出した。この時ニコライはアウグスティヌスの『神国論』によって慰めを受け、死と永生を思いドイツ屈指の名曲と言われるコラールを作ったのである¹⁰⁾。

当時は疫病だけでなく火災に対しても防ぐべき方法を知らなかった。「ゲオルク・クリストフ・アイルマルの依頼による、ミュールハウゼンのオルガニスト。J.S.バハ」と楽譜帳に書かれたカンタータ131番(BWV. 131)の用途は、バハがオルガニストとして着任する前の1707年、ミュールハウゼンの町で大火があり、多くの人々の命が失なわれ、悔い改めの礼拝のために作曲されたと言われる¹¹⁾。

この意味で中世キリスト教思想の重要要素で

あった「死」はバッハの時代においてもまだ消えることのないものであった¹²⁾。

加えてライプツィヒ時代のバッハは職務上、経済上の問題によって悩まされる。

バッハは1730年10月28日、旧友エールトマンに手紙を送る。(エールトマン書簡と呼ばれている)手紙の趣旨は就職依頼である。なぜライプツィヒのカントル、バッハが旧友に就職依頼をしなければならなかったのか。二つの理由に要約することができる。それは経済的理由、そしてライプツィヒ市が音楽を大切にしないという職務上の理由である。バッハはエールトマンの手紙以前、1725年9月、ポーランド国王F. アウグスト一世に手紙を送り、大学付属教会の臨時収入の減少について訴えを述べているのである。

バッハのライプツィヒからの収入は、ケーテン時代のおよそ600ターレルに比べ、約100ターレル(固定給87ターレルと光熱費の13ターレル)であった。このほか穀物と薪の現物支給があった。バッハはエールトマン書簡の中で収入については700ターレルと記しているが収入の多くを臨時収入から支えなくてはならなかったのである。

1729年のマタイ受難曲演奏後、新入生の選択でバッハの試験した入学志願者をライプツィヒ市は無視する。これに対しバッハは1730年8月に音楽活動への援助に対する覚え書きの提出を行なう。これは「整った教会音楽のための簡単なしかし緊急なる覚え書き、ならびに教会音楽の衰退に関する若干の公平なる考察」と題するもので、カンタータ、受難曲のための編成、支金、生徒の音楽的能力衰退についての訴えである。

このバッハの訴えをライプツィヒ市は取りあげようとはしなかった。

1730年9月3日、トーマス学校校長のJ.H. エルネスティの死後、J.M. ゲスナーが就任する。市参事会はゲスナー就任前の8月2日、バッハに対して職務怠慢を理由により減俸処分を決定している。

ゲスナーは1734年、ゲッテンゲン大学に就任

するまでバッハとライプツィヒ市との間をとりもつための働きを行なうのである。しかしゲスナーの後任、J.A. エルネスティの就任によってバッハと市当局、さらに学校との衝突が再び開始されることとなる。

1736年8月、トマス学校の合唱団の助手任用の件で校長エルネスティは市参事会に対してバッハを糾弾し、続いて9月にはバッハを批判する。

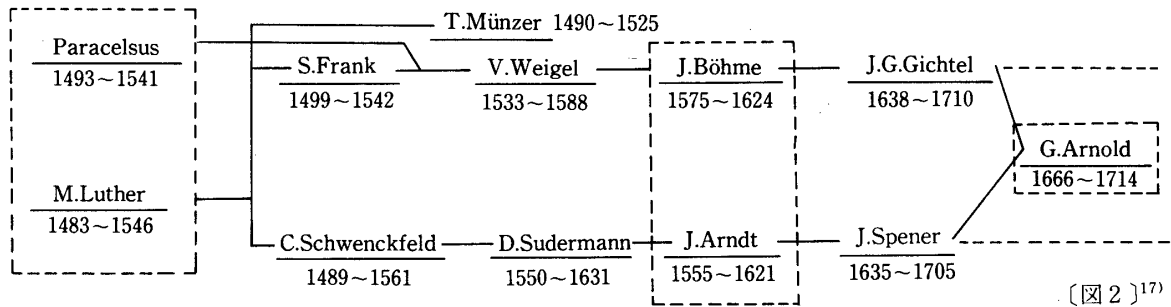
この助手任用問題については1737年4月10日、市参事会に預けられることとなる。

バッハは1733年7月27日、F. アウグスト二世に宮廷作曲家の称号を願う嘆願書を送る。この称号授与によって自らの立場を優位なものにしようと考えたのである。この嘆願書は1736年に再び提出されバッハに対し称号が受与されるのである。

バッハの内なる敵は死であり、外なる敵は生活と職務であった。バッハはこの内と外との攻撃に対していかに生きねばならなかったのか。

バッハはルターから知らされたタウラーの「われらいかにして神の直接の導きを感じるにいたるかを得るのであろうか。すなわち、われらは心してわが胸のうちを見、おのが住み家の門内に安らげく生を送ることによるのである。されば、人間はおのが心のふるさとに住して、外なることを休みなく追い求むるはやめるがよい。かくして人がこの地上にありて、自らをふるさととするならば、必ずやまた、家にありて何をなすべきか、神はいかなる媒介の手だてもなく人の心より何を求めたもうか、を悟るにいたるであろう。かくてこそ、人はおのが身を神に委ね、愛する主のいずこに彼を導きたもうとも、神のみあとに従うがよい。瞑想のときも然り、懺悔者の群に投じ、或いはわが家の飾りを愛する人びとの列に投ずる。行ないのときもまた然りである。喜びにつけ悲しみにつけ、ひたすらただ従うがよい。かくてもなお神の手をおのが心に、またなべての物に感得せざると見きは、よろしくおのが身をさらりとすてて、現し身を思うことなく、神のみむねのままに、ひたすら常にわれらが主イエス・キリストの愛にみ

近世ドイツ神秘主義系譜 (概略図)



〔図2〕¹⁷⁾

ちたるたとしえを眼前に仰ぎつつ、更に歩みを続けるがよい。』¹³⁾ という言葉に魅せられたにちがいない。

敬虔を定義することは難しい。宗教的体験、霊的生活、内的信仰、再生。これらを尊重し重視することによって信仰を深めていくこと。これを敬虔と言うならば、タウラーの「外なるものを求めるのをやめ、我心の内に神の導きを求める」というこの言葉は確かに敬虔の世界を言いあらわしている。

ルター神秘主義はパウロの信仰と深い関わりをもつと言われる。それはルターの「信仰によってのみ義とされる」¹⁴⁾ という義認はパウロの主張からきたものである。しかしこの信仰義認と神秘主義の結びつきを肯定することは難しい。

トレルチはルターの信仰と義認について次のように言っている。「新しい人間が善き《わざ》をつくり出すのであって《わざ》がよき人間をつくるのではない。浄福と確信が一切の道徳行為の源泉なのであって、その結果ではない。』¹⁵⁾ このことから信仰における義とは、罪の意識と同時に恩恵の確信であり、神の内面の働きかけによる内面の充溢を言うのである。パウロの義認は「徹頭徹尾—キリスト論である。』¹⁶⁾ 神と人との仲保者キリスト、このキリスト（十字架と復活）なしに罪の意識、恩恵の確信へと導かれないのである。

ルターの信仰義認はキリストを通しての「キリストと共に死に、かつよみがえる」という意味におけるキリスト神秘主義であると言えることができる。

中世の神秘主義の伝統はアウグスティヌスがプラトンの書物「プロティノス」から受けもの

と言われている。

ドイツ神秘主義の系図 (図2) からルター、シュヴェンクフェルト、ズーダーマン、アルント、シュペーナーに至る線を意志的、心情的筋とし、一方パラケルズス、フランク、ヴァイゲル、ベエーメ、ギヒテルに至る線を意志的、知性的筋と呼んでいる。

このパラケルズスからギヒテルに至るこの筋は自然学による、大宇宙と小宇宙説をもとに新プラトン主義が加えられたものでグノーシス、ヘレニズム、あるいはヨハネ的と呼ばれる。

バッハの作品と数について論じられる際にL.C. ミツラー (Lorenz Christoph Mizler 1711~78) によって設立された《音楽学術協会》(Societüt der musikalischen Wissenshaften) への入会について考えなくてはならない。バッハは晩年 1747 年 6 月にこのアカデミーに入会している。この協会 (アカデミー) の主旨は人間理性、学術研究を重ずることによって、良き社会のリーダーシップとなることを目的とするものである。その精神はモナード (個別的事実) とモナードの関係が予め神から定められたというライプニッツの予定調和の理論によるものである。バッハがこのライプニッツの理論に共鳴してこの会に入会したのか、この関係について明らかにすることはできない。しかしこのアカデミーの精神とドイツ神秘主義のパラケルズスからギヒテルに至る意志的、知性的筋と共通する点で興味深い。

結 語

エッゲベルトは「バロック敬虔主義の生命力の源泉は教化活動よりもむしろ個別的体験であった。』¹⁸⁾ と言っている。その時代の敬虔主

義、神秘主義が体験を重んじ、そこからくる心情及び心情的行動だとするならば、バッハが目的とした「神の御名のために、固定され、秩序だった教会音楽」の実現に伴うライプツィヒでの戦いは外部との個別的体験であり、終生味わった肉親との別れ、死は内部の個別的、心情的体験といえることができる。そしてこの戦いがバッハ自らのルター主義信仰を更に敬虔な世界へ、神秘的な世界へと追いやったといえることができる。

引用文献

- 1) F. ハーメル著、渡辺 健、杉浦 博訳『バッハと時代精神』白水社。ハーメルはバッハの蔵書について H. プロイスの文献『Bachs Bibliothek, Leipzig 1928』によるものとしている。
- 2) 山内貞男著『ヨハン・アルント』（ドイツ神秘主義研究）創文社。p. 409, p. 511.
- 3) P.J. シュペーナー著、堀 孝彦訳『敬虔なる願望』玉川大学出版。
- 4) F.W.W. エッゲベルト著。横山 滋訳『ドイツ神秘主義』国文社。
- 5) W. Neumann, H.J. Schulze 『Bach Dokumente』BÄRENREITER 1963. Wanderungen einer Luther Ausgabe. 角倉一郎、酒田健一編『バッハ資料集』白水社。p. 187.
- 6) W. Neumann, G.J. Schulze. 前掲書, ANHANG 1. Notizen Besitvermerke 3. ハーメル著, 前掲書 p. 127.
- 7) ハーメル著, 前掲書 p. 130~131.
- 8) G. シュティラー著, 杉山 好, 清水 正訳『バッハとライプツィヒの教会生活』p. 131.
- 9) シュティラー著, 前掲書, p. 290. W. Neumann, H.J. Schlze. 前掲書 p. 107~108.
- 10) 日本基督教団讃美歌委員会『讃美歌略解』p.

111.

- 11) 『BACHABEND』曲目解説, カンタータ 131 番より。
- 12) 渡辺信夫著『神と魂と世界と』白水社。p. 72.
- 13) アンナ・アグダレーナ・バッハ著, 山下 肇訳, ダビット社。p. 177.
- 14) 新約聖書, ローマ人への手紙。10 章。
- 15) E. トレルチ著, 半田恭雄訳『ルタープロテスタンティズムおよび近代世界』玉川大学出版。p. 428.
- 16) E. ケーゼマン著, 佐竹 明, 梅本直人訳『パウロの核心』ヨルダン社。p. 116.
- 17) 山内貞男著, 前掲書 p. 469.
- 18) エッゲベルト, 前掲書 p. 272.

参考文献

- 阿部謹也著『中世の窓』朝日新聞社。
 倉松 功著『教会史』（中）日本基督教団出版局。
 A. ミシェル著, 桜井 仁, 森井恵美子訳『音楽の精神分析』音楽の友社。
 E. ゲーゼマン著, 佐竹 明, 梅本直人訳『パウロ神学の核心』ヨルダン社。
 E. トレルチ著, 半田恭雄訳『ルタープロテスタンティズムおよび近代世界』玉川大学出版。
 上田閑照編『ドイツ神秘主義研究』創文社。
 角倉一郎編(角倉一郎, 酒田健一訳)『バッハ資料集』白水社。
 村上陽一郎著『ベスト大流行』岩波新書。
 W. Neumann, 『Das Kleine BACH-BUCH』Die Familie Johann Sebastian Bachs. Ed. Rowohlt.
 A. シュヴァイツァー著, 森田雄三郎, 遠藤 彰共訳『イエス伝研究史』（下）白水社。
 W. ウォーカー著, 塚田 理, 八代 崇訳『宗教改革』キリスト教史(3), ヨルダン社。
 『哲学事典』平凡社。